



田子和則氏

連合駿台会七月例会

「良き」縁 サムエル・ウルマンと青春

(株)番匠 代表取締役 田子 和則氏

連合駿台会三月例会を、令和七年七月十六日(水)十七時三十分より、明治大学「紫紺館」で、田子和則氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

皆さんこんばんは。先週は連日の猛暑日、今週になって台風と大雨……、天候不順で、皆さん方も身体が疲弊していると思いますので、どうぞご自愛いただきたいと思えます。

さて、今回は大学関連で特にお伝えすることはないので、知っているようで知らない連合駿台会のことについてお話ししたいと思います。一つは、四月一日現在で会員数は三百八十三名、うち女性は十六名、四・一%です。四月から六月までの三ヶ月間で九名の方に



連合駿台会報

No.374 令和7年9月15日発行
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052千代田区神田小川町三十二
明治大学「紫紺館」内
電話(〇三)三二九六一四七七
印刷 有限会社 美創

入会いただきましたが、八名の方が退会されています。退会理由は、ご逝去、退職、体調不良で外出が難しい、ということでした。会員の増強につきましては、日頃から皆さんには大変ご支援をいただいておりますが、会員からご紹介者いただいた方は素晴らしい方で大変信頼もおけますし、また継続性も高いので、改めまして、引き続きのご協力をお願いしたいと思います。

二つ目は、当会は春と秋の年二回、連合駿台会寄附講座を開催していることはご存じと思いますが、参加されたことはございますでしょうか？ 今年度の春の講座は、先週の七日、「唐十郎の演劇」というテーマで開催しました。唐さんは昨年亡くなりましたが、昭和三十八年に文学部演劇学科を卒業され、アンガラ演劇の騎手ということで、文化功労者にも選ばれました。大変有名な方がテーマだったせいか、今回はなんと通常の二倍を超える五百名以上の方の申し込みがありまして、急遽大学で一番大きいアカデミーホールでの開催となり、大変好評でした。当会からも大学支援委員会のメンバーを中心に十名ほど参加をさせていただきました。秋の講座は来年の二月二十八日で、テーマは二年後のNHK大河ドラマ『逆賊の幕臣』の主人公、幕末に活躍した小栗忠順おぐらただまことです。何でも一八二七年生まれの小栗忠順の生誕二百年記念で選ばれた

それで、私もよくは知らなかったのですが、小栗忠順は天才肌の幕臣で、日本の近代化を推し進めようとしたが、明治新政府によって「逆賊」とみなされた人物だそうです。加えると、今の駿河台のYWC Aあたりの旗本屋敷で生まれたそうで、試しに行ってみますと「小栗上野介ここに生まれる」という看板がありました。近くになりましたらご案内いたしますので、よろしくお願いいたします。

それから三点目ですが、コロナ禍の影響で中止になっていた日帰りバス旅行を、十月十一日に開催をいたします。主な行き先は、JAXA筑波宇宙センター。ここでは、実物大の人工衛星や日本が世界に誇る国際宇宙ステーション「きぼう」のモデルなどと身近に接することができそうですので、是非ご参加いただきたいと思います。

最後になります。本日の講師は宮大工棟梁の田子和則さん、今日のテーマ「サムエル・ウルマンの青春」は私も大好きで、皆さん方の中にも、座右の銘にされている方も大勢おられるのではないかと思います。私もだいぶ高齢になりましたが、この志を持って、自分のこれからの人生を楽しく送りたい、と思っています。熱いお話をたくさん伺いできると大変期待しているところでございます。

足元の悪い中、大勢の方々にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

* 清水寺落慶法要に宮大工棟梁として参加

私がなぜサムエル・ウルマンの話を書かせていただくかというと、清水寺・三重塔の落慶法要から始まっている。

ご承知の通り、世界文化遺産「古都京都の文化財」の清水寺で、京都市街地からも視認できる清水寺のシンボルのひとつが、この三重塔だ。約三十層の高さは国内最大級で、創建は平安時代の承和十四（八四七）年と伝えられる。現存する三重塔は、火災で焼失後の寛永九（一六三二）年の再建で、本尊として大日如来像を祀り、四方の壁に真言八祖像、天井・柱などには密教仏画や龍が極彩色で描かれている。昭和六十二（一九八七）年に解体修理が実施され、桃山様式の極彩色に戻されたが、この落慶法要に宮大工棟梁として参加したのが私である。

清水寺のはほかの三重塔には見られない五重塔規模のサイズで、その迫力を感じさせる。瓦葺きの屋根の四隅には鬼瓦が配されているが、東南の角だけは、竜神の鬼瓦になっており、火防にしたのだと推測できる。

そんな修理に参加させていただくには、全員が一体となって安全に気をつけて、そして儀式が必要だ。そういう儀式というのは、やりながら「阿吽」の呼吸で、職人たちに伝え

るものだ。そういう心の部分というか、一番大事なところを儀式が伝えていくというふうになっているが、千三百年の歴史を持つ寺院本流儀式、日本独自の文化を伝えることは、伝えていかなくてはならない、と思った。

以下は、私が師事した伝説の棟梁・西岡恒一氏から教えられた「法隆寺大工の口伝」を、私が編集したものである。

一、神仏をあがめずして社頭伽藍を口にすべからず

一、伽藍の造営には四神相応の地を選べ

一、堂塔の建立の用材は木を買わず山を買え

一、木は生育の方位のままに使え

一、堂塔の木組は寸法で組まず木の癖で組め

一、木の癖組みは工人たちの心組み

一、工人たちの心組みは匠長が工人らへの思いやり

一、仏の慈悲なり、母が我が子を思う心なり

一、百工あらば百念あり、一つに統ぶる。これ匠長の器量なり。百論ひとつに止まる、これ正なり

一、百論ひとつに止めるの器量なきものは慎み懼れて匠長の座を去れ

一、諸諸の技法は一日にして成らず、祖神たちの神徳の恵みなり、祖神忘るべからず

一、自然のありようから学び、取り入れた発想・やり方で、教えそのまま工法に生かせば創建当時の建造物ができあがる。生

産性、効率、経済性とかいう発想を持たず、耐久性やデザイン性などの面で、現代の技術論ではおよびつかない機能を持っている。自然から受けた精神性のようなものを感じ取れる。

「青春とは心の若さである」

私はアメリカ・アラバマ州バーミングハム市に広大な、数寄屋造りの茶室「燈心庵」も建築した。平成五（一九九三）年のことで、命名してくださったのは、清水寺の松本大圓名譽官長だった。アメリカと日本は戦争を通じて憎しみ合ったこともあったが、心の中にある燈火を消さないよう、特に茶道を通じて心が通い合い、お互いにゆったりとし合おう、という意味であるという。今や「燈心庵」は文化や人種の壁を越え、日米交流の舞台として活躍し、私そのものとも言えよう。

伝説の棟梁・西岡恒一、田子式規矩法大和流五代目の父・田子光一郎に弟子入りして以来、伝統建築を追求し続けてきたが、これは「目の前の壁はいつでも乗り越えるためにある」と決意したことから始まったと思う。そんな私に限りない力を与えてくれたのは、アメリカの詩人サムエル・ウルマンが書いた一片の詩であった。

「青春」原作：サムエル・ウルマン

邦訳：岡田義夫

青春とは人生或る期間を言うのではなく、

心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦（きようた）を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ、苦悶（くもん）や狐疑（こぎ）や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰（あた）も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥（あか）たに帰せしめてしまふ。年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か、曰く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰（せいしん）、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰（きんぎょう）、事に処する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる
人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる
希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる
大地より、神より、人より、美と喜悦、勇氣と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り、人の若さは失われない。

これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪（はくせつ）が人の心の奥までも蔽（おほ）いつくし、皮肉の厚水（あつこおり）がこれを堅くとぎすに至れば、この時そ人は全くに老いて、神の憐れみを乞うる他はなくなる。青春とは人生のある期間を言うのではなく、本物の様相を言うのだ。優れた創造力、たく

ましい意志、燃える情熱、怯懦（臆病）で意志が弱いこと）を退ける融合心、安易を振り捨てる冒険心……、「青春とは心の若さ」であり、「信念・自信・希望」なのだ、と。

平成九（一九九七）年、日米交流に功績をあげた人物に贈られる、サムエル・ウルマン賞を受賞するが、青春を歌う詩人と青春を生きた私（笑）が、ここでつながったわけだ。

サムエル・ウルマンの経歴を話すと、彼は一八四〇年にユダヤ人の両親のもと、ドイツで生まれ、十一歳でアメリカに移住する。南北戦争が勃発すると、ウルマンはアメリカ連合国防軍（南軍）に兵士として従軍するが翌年に除隊、一八六七年にエマ・メイヤーと結婚した。一八八四年、ウルマン一家はアラバマ州バーミングハムに移住、バーミングハム市教育委員会の委員に選出、一八九三年には委員長となった。十八年間の教育委員在任中、黒人教育に関心を寄せ、黒人にも白人と同じ教育を行うことが教育的にもプラスになると主張した。このほか、病院の設立など、多くの地域社会活動に携わった。市のユダヤ教改革派のエマヌエル教会において、信徒団の長を務め、一八九〇年にはレイラビ（精神指導者）にもなっている。

引退後のウルマンは、多くの時間を趣味（手紙やエッセイや詩の執筆）に注ぎ、彼の詩や詩的なエッセイは、愛、自然、信仰、あ

わただしいライフスタイルの友人、そして「若く」生きることといった、さまざまな題材を扱っている。一九二〇年四月、八十歳の誕生日を記念して、それまでに書き溜められた詩を集め『From the Summit of Years, Four Score (八十年の歳月の頂から)』が家族の手によって自費出版された。一九二四年、バーミングハムにおいて死去。

「青春」の詩は、ウルマンが七〇代で書いた詩の、"Youth is not a time of life; it is a state of mind" (青春とは人生のある期間を指すのではなく、心の様相を言うのだ) とするこの詩は、日本では「人生の応援歌」として受容されている。「青春」の流布には、この詩を気に入ったダグラス・マッカーサーが、執務室の壁に詩のコピーを額に入れて掛けたことで、日本の経済人らに知られるようになった。日本では山形大学や群馬大学でも教鞭を取った岡田義夫氏の訳が広まっている。この詩は多くの企業人によって愛誦され、日本にも五カ所に「青春の詩」の詩碑があるほどだ。

また、アラバマ日米協会によって、日米親善貢献者に対して贈る「サムエル・ウルマン」賞が設けられ、第一回受賞者には盛田昭夫氏(ソニー創業者)がおり、第六回(平成九・一九九七年)には、私も受賞の榮譽に浴した。

異国の地に、小さな日本、を誕生させて

もともとこのいろいろな縁を取り持つてくださったのは、これは映画監督・演出家の内川清一郎さんだった。ました。市川崑、小津安二郎といった名匠たちの下でチーフ助監督を務めた方だ。偶然にこの方と出会わなかったら、アメリカも、サムエル・ウルマン賞も何もなかったのだから、人の出会いというのは、どのくらい大切かとひしひしと思う。この縁で清水寺の森清範清水寺官長(落慶法要当時の官長は松本大圓氏)、隣接する縁結びの神・地主神社の中川平宮司、そして伝説の棟梁・西岡恒一さん……、そういう方々のご縁をいただいて今の私がある。

また、ゴルフのマスターズが行われるアトランタに「Nakato」(日本語では「中藤」という日本料理店がある。日本企業社員はもちろん、マスターズに出場した有名選手、ひいてはアメリカの大統領まで食べに来るような老舗だが、この店を私に任せてくださったのが、故・高原社長。平成二(一九九〇)年のことで、これを数寄屋造りで建てたのだ。

これがアメリカのアラバマ州知事、バーミングハム市長、アラバマ日米協会長などの目にとまり、バーミングハムにある日本庭園の中に茶室建立の熱い要請を受けましたのは、一九九三(平成五)年のこと。要請を引き受けるべきかどうか、随分と迷ったが、バーミ

ングハム市に住んでいたある日本婦人の話が私に決断をさせてくれた。そのご婦人は自分の子供たちに故郷日本の伝統文化を知らせたかったものの、現地には何も無いことを悔やみながらガンで亡くなったという話だった。日本文化を伝える建物が、アメリカの地に一つでも増えるならきっと日米交流にも貢献できるに違いないと決断した。しかしそれからが大変な道程で、造るからには、決して妥協せず、本格的な茶室を造りたいと決意、材料にも徹底してこだわり、吉野の檜と京都北山杉の丸太を使用し、一度日本で組み立て、解体して船でアメリカへ運んだ。そして左官職人、屋根職人など社寺専門の職人たちと一緒に渡米して、それから一年というものは、奉公時代と同じように現地で自ら炊き出しをしては、職人仲間たちと寝食を共にした。そんな私たちの姿に共感した現地の人たちが、ボランティアとして積極的に協力してくれるようになった。そんな日々の中に、茶道の心までも日本人以上に理解してくれるようになったのだ。心は国境を越えて通じ合うことを実感し、苦勞の末、異国の地に、小さな日本、を誕生させたのだった。

先にも述べたが、「燈心庵」の命名は京都清水寺の松本大圓名誉管長が下さったもの。その後、正にこの茶室は、心を燈す庵」として日米交流の懸け橋となった。後年、私はこ

【講師略歴】

田子 和則 (たご・かずのり)

- 一九五二年 群馬県前橋市で生まれる
- 一九七〇年 前橋市日輪寺町の実父・田子式規矩法大和流五代目・田子光一郎に建築工事を見習う
- 一九八七年 京都・清水寺の三重塔落慶法要に宮大工棟梁として参加
- 一九八九年 田子式規矩法大和流六代目を襲名
- 一九九〇年 宮大工古式伝統保存会を設立、会長に就任
- 一九九三年 米国アラバマ州バーミングハム市の依頼で「お茶室(燈心庵) 建立
- 一九九四年 茶室「燈心庵」建設によりバーミングハム市の名誉市民に任命される
- 一九九七年 アラバマ日米協会より日米貢献賞としてサムエル・ウルマン賞を受ける
- 前橋文学館前に青春の詩の石碑建立、前橋青春の会設立・世界で初めてサムエル・ウルマン展を前橋文学館で開催
- 一九九八年 前橋市と米国アラバマ州バーミングハム市と友好親善都市調印
- 一九九九年 前橋国際交流協会理事就任
- 二〇〇二年 前橋地区高等職業訓練校校長に就任
- 二〇一六年 前橋市より国際交流流名誉アドバイザー委属状・群馬県総合表彰
- 二〇一七年 米国アラバマ州バーミングハム市と前橋市・姉妹都市に調印
- 《おもな著書》
- 「本物の住まいをつくる―棟梁の心と木の文化―」

のことによって「サムエル・ウルマン賞」をいただき、また、バーミングハム市より名誉市民の称号まで頂戴した。茶室を通して日本文化の灯を燈したいという私の一念が通じたものと思う。そして、職人としての心を通していくこと、施主様とのご縁の大切さを改めて学んだのだった。

長い歴史を持つ日本の建築文化。私は古の匠たちの心を吸収して、日本の棟梁として私たちに最も必要な心と技を伝えてくれる、気もたらしてくる。自然のぬくもり、大地に根を張り、天へと伸びる命のエネルギ―、先人たちが築き上げてきた豊かな文化と日本人としての誇りを、すべて人々に気づいてほしいと願っている。いい出会いがあり、現在はここに立たせていただいている。これまでの話には、こんな縁があつてそれがあるのだ……、ということをおわかつていただければありがたいと思う。

以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略)



田中 彰一 (たなか しょういち)
昭和六十年・経営学部卒
(株)昭和真空
代表取締役執行役員社長
東京都町田市在住



鼻戸 勝紀 (はなと かつのり)
平成元年・工学部卒
(株)精 常務取締役 東葉建築事業部長
埼玉県さいたま市在住



野儀 健太郎 (のぎ けんたろう)
平成三年・政経学部卒
(株)フェローズ
代表取締役社長
東京都世田谷区在住



尾上 哲也 (おのうえ てつや)
平成四年・商学部卒
(株)みずほ銀行
常務執行役員
東京都文京区在住



大下 哲哉 (おおした てつや)
平成二年・商学部卒
アフラック生命保険(株)
執行役員
東京都中野区在住



中田 泰彰 (なかた やすあき)
昭和六十二年・商学部卒
(株)大気社
常務執行役員営業統括部長
東京都中世田谷区在住



よしだ まさよし
吉田 匡慶
平成十七年・経営学部卒
㈱ブルボン・代表取締役社長
新潟県柏崎市在住

◆明大ニュース

●明治大学校友会

二〇二五年度定時代議員総会を開催

明治大学校友会は七月二十七日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで二〇二五年度の定時代議員総会を開催した。代議員総会は校友会の会則が定める重要事項を審議・決定する会議で、当日は代議員総数五百八十七人中、委任状を含め五百五十人が参加。来賓として、柳谷孝理事長、上野正雄学長をはじめ、田村駿評議員会議長、出見世信之評議員会副議長、山本早苗連合父母会長、大学理事者らが出席した。

物故校友への黙とうの後、廣野宏士副会長の開会の辞でスタートした総会は、冒頭、北野大会長が登壇。猛暑の中、定時代議員総会に全国から大勢の代議員が参集したことへの謝辞と、日頃の校友会へのさまざまな協力に對して大学に感謝が伝えられた。

続いて、来賓の柳谷理事長、上野学長、山本連合父母会長から祝辞があった。柳谷理事長からは、校友会への謝意が述べられた上で、

創立一五〇周年記念事業である「山の上ホテル」の継承、駿河台キャンパス総合施設整備計画「SURUGADAI 60」、体育会競走部の「紫紺の襷プロジェクト」Mの輝きを再び」について説明があった。上野学長からは、校友会への謝辞の後、政治経済学部の政策学科設置、総合数理学部の学科名称変更、副専攻プログラムの導入、生田キャンパスに竣工したセンターフォレストの利用状況等について説明があった。山本連合父母会長からは、校友会と父母会の交流により、世代を超えて明治を愛する心がつながり、地域の方々との交流が深まったエピソードが紹介され、校友会と父母会が大学と地域をつなぐ架け橋となり、学生の成長を支えていくことの大切さが語られた。

その後、議長団・議事録署名人らを選出して議事に入り、昨年度会務の報告と決算、二〇二五年度活動計画・予算、会長推薦本部員および会長推薦代議員の選任などについて審議し、それぞれ提案どおり承認された。

議事終了後は、親子孫三世代にわたって明治大学を卒業した挽野眞明さん（一九五八年政経卒）・挽野剛さん（一九九三年商卒）・挽野隼さん（二〇二四年経営卒）、大幢良則さん（一九六三年法卒）・石丸由紀さん（一九九三年文卒）・石丸嵩大さん（二〇二五年法卒）、新保洋治さん（一九六五年商卒）・新保

一洋さん（一九九三年商卒）・新保亮太さん（二〇二五年情コミ卒）の三組の家族に対して卒業生校友表彰が行われた。続いて全国校友大会旗リレーが行われ、二〇二四年度開催地の香川県から福井県に大会旗がリレーされた後、今年度の福井大会と次年度の徳島大会のPRが行われた。

会の締めくくりには、柳谷理事長と北野会長による万歳三唱があり、フィナーレは、応援団OBがリーダーを務め、校友一同、声高らかに校歌を斉唱。木下唯志副会長が閉会の辞を述べ、総会は盛会のうちに終了した。

●第四回明治ビジネスチャレンジ説明会

起業・スタートアップを目指す学生を支援

明治大学は、二〇二五年四月にアントレプレナーシップ（起業家精神）教育と学生の起業支援を目的として「起業・スタートアップ支援室」を開設した。同室は、二〇二二年度から経営学部が主体となって実施してきたビジネスコンテスト「明治ビジネスチャレンジ」の運営を引き継いだ。八月一日には、駿河台キャンパス・リバティタワーにて「第四回明治ビジネスチャレンジ説明会」を開催し、起業に関心を持つ学生が参加した。説明会では、明治ビジネスチャレンジ副実行委員長を務める岡田浩一経営学部教授が登壇し、起業・スタートアップ支援室設置の背景や、明

治ビジネスチャレンジの開催趣旨について説明。その後、運営協力を行う株式会社クリエの担当者から、募集要項や応募時の留意点について解説があった。

今回の明治ビジネスチャレンジでは、これまでのコンテストの趣旨や方針は踏襲しつつ、校友（卒業生）団体「連合駿台会」の協賛を新たに得て「連合駿台会長賞」（副賞三十万円）を設けるなど、内容をさらに充実させて実施する。

★明治ビジネスチャレンジ応募受付中！

〈目的〉

- ① 価値創造人材の発掘
- ② 持続的な明治大学発スタートアップの育成
- ③ 総合大学ならではの幅広い分野におけるイノベーション事業開発のロールモデルの構築

④ 社会や文化に貢献するビジネスモデルの創出

〈応募資格〉

明治大学に在籍する学部生・大学院生
 〈スケジュール〉

応募締め切り：十月二十七日 (Ohai Meiji
 オンライン提出)

第一次選考会：十一月二十三日

最終選考会：二〇二六年三月十三日

〈表彰〉

・最優秀賞（一本）：副賞百万円、一年間の

起業サポート

・優秀賞（一本以内）：副賞三十万円、一年間の起業サポート

・連合駿台会長賞（一本）：副賞三十万円

・新人賞（一本以内）：賞十万円

●二〇二五年度オープンキャンパス

延べ4万2599人が来場

明治大学のキャンパスを受験生やその保護者に開放し、大学生活の一端を体験してもらう盛夏の恒例行事「オープンキャンパス」が八月に開催された。今年度は二日・三日に生田キャンパス、六日・七日に駿河台キャンパスと中野キャンパスで実施。いずれも事前登録制で行われ、四日間の来場者数は延べ4万2599人に上った。

各キャンパスでは、学生団体「学生プロジェクト（学プロ）」が企画・運営を担い、現役明大生によるトークライブやキャンパス見学ツアーなどを実施。さらに、模擬授業や研究室・ラボツアー、ゼミ活動の紹介など、学問と学生生活の両面から明治大学の魅力を伝える多彩なプログラムが展開された。

来場した受験生や保護者は、学生や教職員との交流を通じて学部ごとの特色ある学びに触れるとともに、活気あるキャンパスの雰囲気を感じていた。参加者からは「実際に学生の話聞き、大学生活を具体的にイメージ

できた」「学問の広がり面白さを知ることができた」といった感想が寄せられ、進路選択に向けて貴重な体験となった様子だった。

●進学ブランド力調査二〇二五

「志願したい大学」で二年連続二位

リクルート進学総研が八月四日に発表した「進学ブランド力調査二〇二五」の「志願したい大学ランキング」（関東甲信越エリア）で、明治大学が昨年度に引き続き第一位となった。

この調査は、リクルート進学総研が大学に対する志願度、知名度、イメージを把握することを目的に行っているもので、今年度で十八回目。二〇二五年四月一日から五月六日にかけて、関東甲信越エリアの学校に通う高校生三年生を対象に実施された。

進学先を検討する際に最も重視する項目として挙げられたのは「交通の便が良い」（五一・八％）。二位・三位は「学びたい、興味ある学部や科がある」（四三・七％）、「教育内容のレベルが高い」（三八・八％）と、学びの内容を重視する回答が続いた。また「就職に有利である」（三七・三％）、「専門分野を深く学べる」（三五・七％）が四位・五位となり、卒業後のキャリアを見据えた大学での成長を重視する高校生の志向がうかがえた。「都心型キャンパス」「『個』を強くする

大学」「就職の明治」といった本学のブランドと親和性の高い調査結果となった。

志願したい大学トップ5（関東甲信越エリア）の二位以下は、二位・早稲田大学、三位・立教大学、四位・東洋大学までが昨年と同様、五位には昨年より順位を一つあげた日本大学が入った。

● 明治大学付属世田谷との

中高大連携についてメディアに発信

明治大学は六月三十日、駿河台キャンパス・リバティタワーで「明治大学付属世田谷との中高大連携」をテーマに第三十一回メディア交流会を開催し、新聞社などメディア関係者六十人が参加した。

本交流会はメディアとの関係構築を目的に二〇〇六年度から実施しており、二〇二二年四月には和泉ラーニングスクエアの竣工に合わせて開催するなど、時節に合わせたテーマを設定している。今回は、二〇二六年四月より「明治大学付属世田谷中学校・高等学校」に名称変更し、本学の系列校となる日本学園中学校・高等学校との中高大連携をテーマに、系列校化の背景や現状の説明を行った。交流会は二部制で実施。第一部では、本学と日本学園関係者に加え、学外の有識者による講演と質疑応答を行った。進行は黒澤睦副学長（社会連携・広報担当）が務め、主催者

あいさつに立った岡田誠司経営企画担当常勤理事（広報戦略本部長）が「メディアの皆さまの忌憚のないご意見をお聞かせいただきたい」と述べた。

加藤久和副学長（教務担当）は講演で、現在、本学の入学者の約七〇％が一般選抜であることに触れた上で、付属校を増やすことで安定した入学者の確保が可能になると説明。現時点において付属世田谷高校からは卒業生の約七〇％（約二〇〇人）が推薦入試で本学へ進学できる枠を用意していると述べた。また、すでに実施している同校との中高大連携の事例も紹介した。

続いて日本学園からは田部井茂理事長からあいさつがあった後、日本学園教諭の工藤さやか情報推進部長（広報担当）が登壇。系列校化と同時に進めている共学化のため、新校舎の建設を含む環境面の整備が進んでいることなどを報告したほか、系列校化後も継続する教育の特色として、同校が約二十年にわたり実践してきた探究プログラム「創発学」を紹介。「人は得意な道で成長すればよい」という創立者・杉浦重剛の言葉を軸に、創造・発信・学習の力を育んでいると説明とした。

さらに、有識者として登壇した安田教育研究所代表の安田理氏は、中高受験の動向に触れながら、日本学園の「創発学」の先見性や、「個」を強くする大学」を理念とする本学と

の親和性を挙げ、評価した。

第二部は、懇親および情報交換の場として実施され、須田努外務担当常勤理事のあいさつで開会。閉会のあいさつでは、日本学園の谷口哲郎校長が「理数教育に注力しているのも本校の特徴。文系・理系を問わず活躍できる理数系の卒業生を輩出していく」と述べた。第一部・第二部を通じて終始活発に交流が行われ、本学にとって四十二年ぶりとなる系列校設置に対するメディアの高い関心がかうか

● 「明治大学戦没学徒忠霊殿」慰霊祭を挙げる 御霊を祀る新潟縣護國神社で

明治大学の戦没学徒の御霊を慰め鎮める忠霊慰霊祭が七月十日、新潟縣護國神社（新潟市中央区）にて厳かに執り行われた。明治大学からは柳谷孝理事長、長吉泉顧問が出席。校友会からは北野大会長、徳丸平太郎相談役および高橋淑浩校友会新潟県支部長をはじめ、関係者三十三人が参列した。

明治大学校歌の奉納、玉串拝礼に続き、あいさつに立った柳谷理事長は、同支部および同神社の関係者への謝意を述べるとともに、忠霊殿に祀られている本学の諸先輩方の御霊に対し、本学の近況報告と、今後の進むべき方向性について、次のとおり力強く決意を述べた。

★柳谷理事長コメント

二〇〇六年から四年にわたり大学史資料センターが実施した調査の結果、本学の学徒出陣者数は、少なくとも出征者四千六百三人、戦没者三百二十四人に上ることが確認されており、校友会新潟県支部の尽力により、現在これらの戦没者の御霊がこの忠霊殿に祀られている。

戦後八十年になる令和の時代においても、ロシアによるウクライナ侵攻や中東における軍事行動など、戦禍が広がり続けている。戦争の悲惨さを決して風化させることのないよう、明治大学はこれからも人類の平和に貢献し続ける大学として、一層の発展を目指すことを御霊に誓う。

★明治大学戦没学徒忠霊殿

学業の道半ばにして学徒出陣などで戦死した明大生の戦没者を祀る霊廟。戦時中は駿河台校舎の旧図書館内に安置されていたが、新潟県出身校友の尽力により、一九五〇年に新潟県護国神社に移された。二〇〇六年には、同神社のご厚意により、本殿脇に本学独自の「忠霊殿」を新たに建立。以後、毎年、理事長ら大学関係者が校友会新潟県支部と共に慰霊を行っている。

●OB社長

▽日高信用金庫 新保雄治氏（一九八六年文

学部卒・六十五歳）

●楠瀬博明教授

児玉圭司「願晴る」研究振興賞を受賞

理工学部物理学科の楠瀬博明教授が、二〇二四年度明治大学児玉圭司「願晴る」研究振興賞を受賞し、七月二十八日、駿河台キャンパス・紫紺館で授賞式が行われた。この賞は、当会顧問の児玉圭司氏（一九五七年経営卒）による寄付を原資として創設されたもので、過去五年間の国際研究論文における発表数や被引用数などに基づき、研究で顕著な成果を挙げた教員を表彰するもの。楠瀬教授の研究分野は物性理論、磁性・超伝導理論。日本物理学会欧文誌に掲載された論文二件が二〇二四年の「被引用数トップ10」に選出されるなど、世界的に高い評価を受けている。

授賞式では、表彰状と目録の贈呈に続いて上野正雄学長が祝辞を述べた後、児玉氏が登壇。振興賞の名前に冠した「願晴る」という言葉が「願いを込めて晴れやかに努力する」という造語であることを紹介した上で、「楠瀬教授は研究分野の第一人者。最先端の研究に触れられる研究室は、学生らにとっても素晴らしい環境」と教育面での貢献にも言及した。表彰を受け、楠瀬教授は「役に立つかどうかを先に考えるのではなく、自分が楽しんで取り組んだことが結果として役に立つとよい。

今回の受賞は、そうした姿勢を「願晴っている」と評価いただいたものと受け止めている。これを励みに、今後も願晴っていききたい」と今後の研究生活への意気込みを語った。

●政治経済学部

政策学科創設キックオフシンポジウム

自治体・政府・研究者が政策の未来を語る

政治経済学部は八月七日、駿河台キャンパス・リバティホールで政策学科創設キックオフシンポジウム「課題解決のプロが語る政策」自治体・政府・街づくりの視点から」を開催した。二〇二六年四月に新設される「政策学科」の創設を記念して行われた本イベントには、高校生や保護者、自治体関係者ら三百人を超える来場者が集まった。

シンポジウムには、埼玉県知事の大野元裕氏、（一財）地域総合整備財団理事長で元復興庁事務次官の末宗徹郎氏、政治経済学部の野澤千絵教授が登壇。司会は同学部の柴田有祐専任講師が務め、それぞれ地方自治体・国・研究者の立場から、現代社会が直面する課題と政策の役割について議論がなされた。

冒頭、政策学科設置準備委員長の牛山久仁彦教授が「政策を学ぶことは、社会の未来を構想すること」と語り、学科創設の意義を強調。続くパネルディスカッションでは、人口減少やグローバル化に伴う課題、公民連携の

可能性、政策形成の現場で求められる実践力などについて、具体的な事例を基に活発に意見が交わされた。

参加者からは「政策の現場を知る貴重な機会だった」「将来の進路選択に大きなヒントを得られた」といった声が寄せられ、政策学科への期待の高さがうかがえた。

政治経済学部は今後、社会課題に向き合う人材育成を目指し、教育・研究の充実を図っていく。

●和泉キャンパスの広場と通り

三カ所の名称を決定

明治大学は、五月十二日から六月十二日にかけて、学生・教職員を対象に、和泉キャンパスの広場と通り三カ所の名称案を募集した。約一カ月の応募期間で百三人から応募があり、和泉委員会による選考の上、名称を決定した。

和泉キャンパス課の担当者は「それぞれの名称が、多くの方に長く親しまれ、日常の中で自然に使われていくことを願っている」と語った。今回決定した名称は、今後、大学ウェブサイトや各種パンフレットへの掲載などで広く使用される予定。

新名称 場所 考案者

① ラーニングプラザ（ラーニングスクエア 北側外構エリア）

② 和泉のへそ（旧第四校舎跡地エリア）

③ 和泉さくらモール（中央通りメディア棟北側のメイン通り）

●水泳部

世界水泳女子400m個人メドレーで

成田実生選手が銀

FISUでも5選手がメダルを獲得

体育会水泳部の成田実生選手（情コミ1）は、七月十一日から八月三日にかけてシンガポールで行われた世界水泳選手権に出場し、競泳女子四〇〇m個人メドレーで銀メダルを獲得した。八月三日の決勝では、前半こそ出遅れたものの徐々に追い上げ、自己ベストを更新する4分33秒26でゴール。同着となったオーストラリアのフォレスト選手と共に銀メダルを手にした。成田選手は同大会で七月二十八日、競泳女子二〇〇m個人メドレーでも五位入賞を果たしている。

七月十六日から二十七日にかけてドイツのライン・ルール地方で行われた学生の国際総合競技大会「FISUワールドユニバーシティゲームズ2025」の競泳では、渡邊裕太選手（経営3）が男子4×100mフリーリレーで銀メダル、男子200m個人メドレーでは銅メダルを獲得。清水博斗選手（政経4）と渡邊選手が共に出場した男子4×200mフリーリレーでも銅メダルを手にした。長尾佳音選手（経営4）も、女子4×200

mフリーリレーで銅メダルを獲得。さらに、男子4×100mメドレーリレーでは吉田悠真選手（農3）・西村優雅選手（情コミ2）が銅メダルを獲得。

水泳部の選手たちが世界の舞台で輝きを放った。

★成田選手のコメント

思い描いていた最高の形で目標を達成することができ、とてもうれしかったです。支えてくださる方たちへの感謝の気持ちを忘れず、また新たな目標に向かって頑張ります。

★渡邊選手のコメント

自己ベストを〇・五秒更新して決勝に進むことができました。決勝ではタイムを落とし、悔しいですが、強豪アメリカをあと一歩まで追い詰めました。さらに初めて学生新記録を樹立でき、とてもうれしいです。応援ありがとうございました。

●卓球部

明大ドリームゲームズ

OBと現役が世代を超えて熱戦

体育会卓球部は八月十二日、調布市総合体育館でエキシビジョンマッチ「GOATUS presents 明大ドリームゲームズ」調布市制施行70周年記念事業」を開催した。二〇二〇年の創部九〇周年記念試合以来二度目の開催で、今回は初の有観客試合となり、約二百人

が来場した。試合の様子は卓球部公式YouTubeでも配信され、翌日には再生数一万回を超えるなど、大きな反響を呼んだ。

大会には、世界選手権男子ダブルス二〇二五年金メダリストの戸上隼輔選手（井村屋グループ）、同二〇二一年銅メダリストの宇田幸矢選手（協和キリン）、同二〇一七年銀メダリストの森蘭政崇選手（BOBSON）らOBが参加。東京五輪混合ダブルス金メダルの水谷隼氏がアンバサダーを務め、トークで会場を盛り上げた。

現役学生からは、全日本選手権ダブルス王者の飯村悠太選手（商3）、木方圭介選手（政経2）をはじめ多数が出場。OB・現役学生が入り交じり計10試合が行われ、世代を超えた熱戦に観客から大きな拍手が送られた。また、齋藤清総監督や渡辺武弘前日本代表女子監督といったレジェンドOBがベンチに入り、選手へアドバイスを送った。

高山幸信監督は「学生にとってもOBにとっても有意義な場になった」と振り返り、今後も継続開催の意向を示した。

●射撃部

日本学生選抜スポーツ射撃競技大会で

団体優勝——ペア・個人でも三種目で優勝

体育会射撃部は、六月六日から六月八日にかけて能勢町ライフル射撃場（大阪府豊能

郡）で開催された第二十七回日本学生選抜スポーツ射撃競技大会に出場し、女子総合団体で優勝、男子総合団体で準優勝を飾った。

その他、10mエアライフルミックスチーム競技で長屋光珀選手（国日2）・山田音緒選手（農1）のペアが優勝、10mエアライフル男子立射60発競技で長屋選手が優勝、10mエアライフル女子立射60発競技で泰地陽詩選手（商2）が優勝するなど、各種目で存在感を示した。

★長屋光珀選手のコメント

今回の学生選抜では自分の成長を実感するとともに、今後の課題も見つけることができました。一年次の学生選抜やインカレでは、ファイナルに残れず悔しい思いをしました。その悔しさをバネに練習を重ねてきました。今回はその成果を発揮できたと思います。GOGスモールポアライフル男子三姿勢60発競技では惜しくも二位でしたが、関東学生スポーツ射撃選手権春季大会で三位だった悔しさを晴らせました。今後も一つ一つの大会に全力で取り組んでいきます。

●自転車部

吉田唯斗（政経4）&本田音輝（経営3）

二人乗りの自転車です速さを競う、大学限定のトラック種目「タンデム・スプリント」で快進撃を見せる吉田・本田ペア。吉田が前で



経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB・OG諸氏よ！
来たれ！「連合駿台会へ！」

連合駿台会は、経済人・法曹人・文化人として活躍する明治大学の卒業生が集い、母校の発展と次世代支援に取り組むOB・OG組織です。その源流は、1953年設立の「茗水クラブ」と、1964年設立の「明友クラブ」。両者が統合し、2002年に発足した歴史と伝統のある会です。

7月16日には、駿河台キャンパス・紫紺館にて7月例会を開催し、126人の会員が参加しました。今回の講師は、(株)番匠の代表取締役・田子和田則氏。「良きご縁 サミュエル・ウルマンと青春」をテーマにご講演いただきました。

田子氏の本職は、宮大工棟梁。米国アラバマ州バーミングハムにお茶室を建立した功績により、日米関係の発展に貢献した人物に贈られる「サミュエル・ウル

マン賞」を受賞。ウルマンの詩『青春』にある「青春とは、人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ」という言葉の精神を広める活動にも力を注いでおられます。

連合駿台会ではこのように、各界の第一線で活躍する講師をお招きし、知的交流と親睦を深める機会を定期的に設けています。皆さまのご入会を心よりお待ちしております。



~~~~~ 各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします ~~~~~

資料のご請求はこちらまで

連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 HP : <https://www.rengosundaikai.jp>  
Email : [rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp](mailto:rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp)

★明治大学広報(9月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

舵を取るパイロット、本田はストーカーとして後ろでエンジンを担う。二〇二三年の全日本大学対抗選手権（インカレ）で初タッグを組む三位の成績を残すと、二四年全日本学生選手権では優勝、同年のインカレと今年度の全日本学生選手権では準優勝と、毎レース、表彰台に上がっている。そんな名コンビが今年度のインカレでラストレースを迎える。

吉田・本田ペアの誕生は奇跡に等しい。福島県で生まれ、小学生から陸上競技に励んでいた吉田は「地元で自転車競技が強い高校があり、親に勧められたのがきっかけ」と高校から自転車競技に転向した。吉田より一つ後輩の本田も「一人で自転車部の体験に行くのが寂しいと言う友人に誘われて行ったら、入らなければいけない雰囲気になった（笑）」と愛媛県で高校からこの世界に飛び込んだ。当時の主将から声を掛けられ、タンDEM・スプリント出場経験のある吉田とのペアが結成された。結果は2カ月の練習で3位入賞。それぞれ「相性が良かった」（吉田）「天職だと思った」（本田）と語り、大学限定の種目であることが悔しいと思うほどに息の合ったレースで、次々と観客を魅了した。今年度、ペア結成三年目にしてラストレースとなる2人の強さのゆえんは出走前、欠かさずに行う固い握手。「お互いを勝たせてやりたい。一緒に競技ができる感謝の気持ち」（吉田）を

それぞれの手に込め合い、レースに挑んでいる。最後に掲げた2人の目標は優勝だけでなく、学連新記録を残してその名を歴史に刻むこと。唯一無二の輝きを放つ2人がペダルを踏み込む。

### ◆七月例会出席者

青柳勝栄、秋谷勝俊、浅井宏、阿部倫明、同ご同伴、池田一義、石川均、石田和士、石松喜典、伊東正博、伊原敏雄、潮田伊佐夫、梅野修、榎本知佐、大野正美、大前実之、大村託現、岡田誠司、奥山弘幸、小座間善隆、鬼塚和也、加賀美猛、風間淳、同ご同伴、勝俣正義、金山貴博、金子圭太、狩野省市、栢森靖、河村博、神林光、清野明男、杓掛英二、久保聡、久保田優子、栗原権右衛門、黒崎昭男、児玉圭司、同ご同伴、小濱雅悦、小松健、小山修、根田吉雄、齋藤柳光、酒井喜壽、坂田英夫、佐藤仁、澤野太嘉嗣、柴田清之、進藤健一、杉浦伸二、鈴木一巳、鈴木隆志、関根均、高澤徹、高澤尚志、武内裕、田代恭一（代理）、谷原誠、田村駿、田村健、樽見俊之、辻井知明、当山明彦、徳丸平太郎、戸田琢磨、富水流孝二、長尾睦子、長岡利行、中川敏洋、長瀬琢磨、中野祥宏、中村豊、西澤豊、新田晃、根岸伸明、野田康平、萩原裕次、橋本竜也、長谷川進一、畠中君代、馬場範夫、原宏、飛弾健一、平田桂子、平田静子、深代尚夫、

同ご同伴、福田和彦、藤井雅則、藤代耕一、同ご同伴、古本英樹、眞壁八郎、牧野泰、松崎優子、向井眞一、村岡健、村山友彦、室井恵明、柳谷孝、山口大介、山口又宏、山田晃久、山田朝彦、山端康幸、弓野理恵、吉田菊次郎、吉田光一郎、渡邊健三、渡邊谷子

### 【編集後記】

夏休暇も終わり、なかなか涼しくならない九月ですがいかがお過ごしでしょうか。

何やら最近、マスコミで学生街のお店やら各大学対抗のカレー巡りといった企画が目につきます。もちろん神田、早稲田、三田など界限の飲食店は、この時代も学食も含め賑やかなようです。

わが明治大学の駿河台も良く話題に上り、リバテータワー十七階の学食が紹介されています。連合駁台会に入会してから、駿河台に行くこともあり、とても見晴らしの良い素晴らしい学食だなあと感じています。

私は当時の工学部だったので、ずっと生田校舎で、学食中心でした（今は無いですが）。ライスとお味噌汁かサッポロ（札幌ラーメンの麺がない汁物）、余裕があれば単品百五十円のいかフライが定番でした。

もつと余裕のある時は、めったに使わない正門の前にある「喫茶タック（今は無い）」でナポリタンかミートソースを食べたものです。

山を下りてすぐのところ「宿場」「青柳」おしげ食堂」などがあり、よく食べたなあと思っています。

いろいろなマスコミの記事など拝見すると、今の学生さんは色々選べて素晴らしいなあと思います。卒業して四十年近くになると「ああ、おもしろかったなあ、また学生時代に戻りたいなあ」と夢に出てきます。皆さんの学生時代の食事事情はいかがでしたでしょうか。

（大石哲也）